

冬 至 の 話

—— 曆 の 出 發 點 ——

『毎日々々、太陽は東から出て、西に入る』といふのは誰でも知つてゐることですけれど、しかし之れは、實は太陽が動いてゐるのではなくて、むしろ、わが地球が自轉してゐる結果なのです。それでなくて、太陽は天の黃道の上を、少しの脱線もせずに、西から東へくと進んでゐます。其の歩みは遅くて、天を太陽が一周するのは一ケ年かゝりますが、此の三百六十五日の間に、春分點と、夏至點と、秋分點と冬至點と、——この大切な四つの點を通ります。

春分や秋分は、太陽が黃道と赤道との切り合ふ點に來る時で、其の日、世界中、ごこの國でも、晝と夜とは同じ長さ、即ち十二時間づつです。之れに反し夏至は、晝の最も長く、夜の最も短かい日、又、冬至は晝の短かく、夜の長い日です。

太陽が、こんなにして、一年間に、天空を、北から南へ、又、南から北へずれて行くといふのは、昔の人には不思議なことでした。殊に、北國に住む人々にとつては、毎年々々、秋の末、冬の初めになると、太陽がだんく低くなつて行き、草木は枯れ、寒氣が襲つて來ることが、誠に心淋しいものでした。『これでは、遂に世界が闇の淵に沈むのではないか!』と、心配した人も多かつたでせう。

ところが、十二月の末になると、太陽は赤道から二十三度半ほど南へ下つた所で一旦停止し、それから、何か思ひ直したやうに、元の通り、北へくと戻つて來るのです。これと同時に、晝は長くなり、夜は短くなります。——之れを見て、人々は暗い心から俄かに明るい喜びを覺えて、御祭りをすることとなりました。之れが冬至の祭りとなり、又、クリスマスの祭りともなりました。又、お正月だつて、こうした太陽のよみがへりを記念するために定められることが元になつたのです。

冬至は、今の暦では十二月二十二日に起りますが、今から二千年も昔には、之れが十二月二十五日に當つてゐました。尙ほ、更に大昔しには此の日が一月一日であつたのです。

冬至とは、『冬の至り』の季節です。但し、之れは『冬がやつて來た』といふ日ではなくて、むしろ『今が冬の極點』と言ふ日なのです。

昔しから、我が日本でも、支那の國でも、毎年、舊暦の正月から三月までが春、四月から六月までが夏、七月から九月までが秋、十月から十二月までが冬と定められてゐました。この舊暦法では、冬至は十一月中に起ります。即ち、冬と定められた三ヶ月の中央に當るのです。しかし、太陽や、日陰の運動から見ると、冬至の日は、太陽が南へ行つた極點で、同時に又之れは太陽が南から北へ出發する日なのですから、昔流の陰陽説によれば、陰が極まつて、陽の始まる日といふ意味にもなり、朝廷でも、民間でも、この冬至を祝ひました。殊に、冬至の日が十一月朔日に當る場合には、「朔旦冬至」と稱へて、永く之れを

記念しました。

西洋では、天文學上、冬至を、冬の始めとします。そして、春分の日を春の始めとしますから、『冬』は十二月二十二日から三月二十一日まで、合計八十九ケ日間です。

支那にも、一時、冬至を正月とした歴史があります。前にも述べました通り、冬至は、太陽が南行から北行に轉ずる時で、即ち、『一陽來復』の時なのです。から、之れを曆年の始まりといふ風に考へるのは、誠に尤もなことを言つて宜いわけでありませう。

右の如くにして、西洋の曆にも、東洋の曆にも、『冬至』を一つの紀元、又は轉機、又は、出發點とする思想が見えるのは面白いことです。之れは、今の人が考へる以上に、昔しの人が、天體の運行を忠實に觀察した證據と見ることが出来ます。

近年は、曆を作る方法が、數理上に決定して了つて、今更、天體の運行を事

新らしく觀測する必要がなくなつたため、冬至と、年始とが、何のゆかりも無いものの如く思はれるやうになりました。

クリスマスなどは、全く或る宗教上の祭日といふ意味にのみ考へられるやうになりましたけれど、元は、やはり、冬至とも關連し、又、一月一日とも關連てゐたものなのです。此等の關係を、少くとも天文學上からは忘れたくありません。(山本)

東亞天文協會の總會

下記の次第で總會を開催します。協會員は言ふに及ばず、同好の友人たちも御誘ひの上、遠近に係らず御列席下さい。

日 時 11月21日 13時より (時刻厳守)

第1會場 (13時より) 神戸市海洋氣象臺 (見學)

第2會場 (15時より) 神戸市下山手通六丁目 青年會館

臨 時 總 會 (第1會場) (15 時 以 上)

1. 開 會
2. 挨拶
3. 講 演

“宇宙の天文學” 本會々長 理學博士 山本一清氏

“航海の話” 日本海員協會長 宮本吉太郎氏

4. 議事及び諸報告 (17時より)

5. 有志の懇親晚餐會 (18時より) (會費80錢)